第１２課　バビロンと最後の戦い

【暗唱聖句】

「その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である」黙示録17:5

【今週のテーマ】

今週は黙示録に描かれているバビロンとハルマゲドンという言葉に着目し、その意味する霊的最後の戦いについて学びます。

【日曜日・怒りのぶどう酒】

聖書に2つに都が登場します。一つはエルサレム、そしてもう一つはバビロンです。エルサレムは神と神の契約の民の町を象徴しているのに対して、バビロンは偽りの宗教、神への反逆、混乱、暴力や抑圧などを象徴しています。バビロンという言葉は黙示録に非常に多く登場します。バビロンについてはっきりしていることがいくつかあります。

「また、別の第二の天使が続いて来て、こう言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」黙示録14:8

「あの大きな都が三つに引き裂かれ、諸国の民の方々の町が倒れた。神は大バビロンを思い出して、御自分の激しい怒りのぶどう酒の杯をこれにお与えになった」黙示録16:19

「その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である」黙示録17:5

「天使は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた忌まわしい獣の巣窟となった」黙示録18:2

「彼女の苦しみを見て恐れ、遠くに立ってこう言う。「不幸だ、不幸だ、大いなる都、強大な都バビロン、お前は、ひとときの間に裁かれた。」黙示録18:10

「すると、ある力強い天使が、大きいひき臼のような石を取り上げ、それを海に投げ込んで、こう言った。「大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない」黙示録18:21

これらの聖句からはっきりわかることは、多くの人々に対してぶどう酒を飲ませたかのように酔わせて、正しい判断をできなくさせるが、やがて必ず倒れるということ。荒々しく投げ出され消え去るということ。神の怒りを招き裁かれることです。

「すべての国の民は、怒りを招く彼女のみだらな行いのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女とみだらなことをし、地上の商人たちは彼女の豪勢なぜいたくによって富を築いたからである。」黙示録18:3

バビロンという名前には混乱という意味があります。そして神の怒りを招くみだらなぶどう酒を飲ませることを繰り返し出てきます。つまりこれは、バビロンの中に留まるなら、私達の心は常に定まらず、いつも混乱と不安の状態に陥ってしまうということを表しています。また他の正しく創造主を拝むことをせず、他の教えに心が惑わされたり、贅沢と富を追い求めたりするようになります。これは人間が堕落し、罪に溺れ、神様から遠く離れてしまうことを表しています。

【月曜日・バビロンは倒れた】

「天使は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた忌まわしい獣の巣窟となった」黙示録18:2

倒れるとわかっているところに、私達は留まることができるでしょうか。悪霊どもや汚れた霊どもの住処に留まりたいと思うでしょうか。それはまるで巨大地震が来るとがわかっていながら何の備えもしない、あるいは、死に至る病原菌が蔓延する部屋の中にじっと閉じこもっているようなものです。

サタンはあらゆる偽りとしるし、不思議と不義の惑わしをもって働き、やがて教会と世俗が一体となったとき、教会はバビロンとなります。完全なバビロン化はまだですが、そうなってからそこを脱出ことはできません。そうなる前にバビロンから逃れなければならないのです。バビロンから逃れるとは、真実なる創造主なる神を礼拝することと同義です。

【火曜日・ハルマゲドン】

一般の人にハルマゲドンという言葉に抱くイメージを訪ねると、核​兵器​に​よる​破滅​的​な​結末、環境​異変​に​よる​大​災害、地球​と​他​の​天体​の​衝突、神​が​邪悪​な​人々​に​もたらす​滅びなどの答えが返ってきます。つまり、世界の終わりを連想させる代名詞としてとらえているようです。クリスチャンに尋ねてみると、中東戦争、2億人の軍隊がイスラエルに進行するなど、少し具体的な解釈が入りますが、軍事的、政治的な衝突だと考えている人が多いようです。しかしハルマゲドンの闘いを考える上で重要なのは、それが軍事的、政治的な要素が関係するとしても、その根底にあるのは霊的な善と悪との闘いです。このことがはっきりわかるのは黙示録16章の12～16節にかけて、誰が誰と戦うかについてはっきりと言及されているからです。

「第六の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、川の水がかれて、日の出る方角から来る王たちの道ができた。わたしはまた、竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来るのを見た。 これはしるしを行う悪霊どもの霊であって、全世界の王たちのところへ出て行った。それは、全能者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。 ――見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである。汚れた霊どもは、ヘブライ語で「ハルマゲドン」と呼ばれる所に、王たちを集めた」黙示録16：12～16

第六の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、日の出る方角から来る王たちが来ます。この王たちとは誰のことでしょう。日の出る方角（東）から来られる王たちとはキリストと御使い、そしてあるいはキリストに従うものたちをも象徴していると思われます。

・東から太陽は上り、太陽はキリストを象徴している。

・「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである」（マタイ福音書24:27）

・「わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た」黙示録7:2

古くに建てられた教会は東向きに建てられ、教会に集まる人々が東側を向いて礼拝できるようにしたものが（西側が入口、一番奥の祭壇部分が東側）が多いそうです。また「東向きに建てる」ことを英語で“orient（オリエント）”と言います。教会に来る人々を東の方向に導くことから、“orient”は「正しい方向に向ける」「導く」という意味でも使われるようになりました。日本語の「オリエンテーション」などはそこから来ています。またorientには「東」「アジア」という意味の名詞でもあります。

次に「竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来」ます。それらはしるしを行う悪霊であり、ハルマゲドンにこの世の王たちを集めるとあります。ちなみに蛙は両生類なので海の獣と地の獣の両面を象徴していると考えられます。ここに東から来る神の軍勢と悪魔の軍勢がハルマゲドンの戦いに集結するのです。

【水曜日・木曜日：ハルマゲドンとカルメル山】

ハルマゲドンという言葉は、ヘブル語をギリシャ語にしたもので、山・丘を意味する「ハル」と、メギドという地名を表す「マゲドン」という2つの言葉からできています。したがってメギドの山あるいは丘という意味の言葉であると解釈されるのが一般的です。メギドは古代世界において重要な場所であり、エジプトとアッシリア（メソポタミア）の交易ルートを支配していました。それゆえここではよく戦いが繰り広げられた古戦場としても知られています。ただ紀元前500年ころまで居住者がいましたが、今はただ丘が広がるだけで何もありません。

ハルマゲドンの戦いは文字とおりこのメギドの丘で行われるのでしょうか。それとも他の表現と同様に象徴なのでしょうか。ところでこの問題を考えるときに、まず注目すべきは、「第六の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、川の水がかれて、日の出る方角から来る王たちの道ができた」（黙示録16：12）のみ言葉です。ここに「ユーフラテスの川の水がかれた」とあります。かつて、エジプトから脱出するときに紅海の水がかれ、カナンの地に入るときにヨルダン川の水がかれました。つまり水がかれるとは、しばしば救いのみわざと関連しているのです。

バビロンが滅びるときもそうでした。ペルシャ軍はバビロンに攻め入るために、その前を流れる大きな川の水をせき止めて、からしたのです。その結果、ユダヤ人たちは解放されることになったわけですが、そのバビロンの前に流れていた川こそ、ユーフラテス川だったのです。そして、第6の天使が鉢を傾けた時、そのユーフラテス川がかれたのです。これは神の民の勝利が目の前であることを表しているのです。

さて、ハルマゲドンはどこなのかという問題ですが、メギドには山はありません。しかし、周囲を見渡した時、カルメル山があることがわかります。山と言っても日本人がイメージする山ではなく、ほぼ丘に近いもので、現在は世界遺産に登録されています。もし、ハルマゲドンがこのカルメル山を象徴しているとすれば、意味が出てきます。それはかつてここで、バアルに膝をかがめる偽預言者に対してエリアがたった一人で霊的な戦いを挑んだのです。その戦い方は祭壇を築いて、燔祭を天からの火をもって焼き尽くすというものでした。つまり、真実の神様への礼拝するのか、それとも偽の偶像を礼拝するかの戦いでした。

３天使のメッセージは、真実の礼拝への招きです。ハルマゲドンがいかなる形の戦いになるにせよ、真実の神様への礼拝は問われることは間違いありません。